

近現代文学における「食・もてなし・家族」

—夏目漱石・村上春樹の場合—

台湾大学 教授 范淑文

1 はじめに

多田道太郎は食文化について次のような見解を示している。

食というのは一種の暴力ではないか。攻撃性といってもいいかもしれません。植物なり動物なりをぶった切って、ぐしゃぐしゃにして、それだけではたりないで腹の中へ入れてしまう。これは考えればたいへん残酷なことです。(中略) ある小説を読んだときに私がショックを受けたのは、その小説に出てくる女の人が、人前で食事をするのは非常に恥ずかしいというんです。セックスはぜんぜん恥ずかしくない。ところが食というのは非常に恥ずかしいというわけです。ぼくはそういう敏感さがなかったので、食事というのは社交的なものだというふうに思わされてきました。しかしいわれてみると、食事を共にする事はなるほど恥ずかしいことだなという気分が、どうも遠く原始のむかしから私たちの体内に残っているような気がします。ある動物、ある人間は人の前で食べることをしないで、こそこそ隠れて食べます。¹ (下線引用者、以下同じ)

上掲の引用文に従えば、食とは「一種の暴力」であり、「攻撃性」がある行為である。氏は、「女の人が、人前で食事をするのは非常に恥ずかしい」とある小説に書かれている一節に示唆され、「ある動物、ある人間は人の前で食べることをしないで、こそこそ隠れて食べます」という、人間の一面に気づいている。氏の読んだ小説がどの作品であったかは知る術がないが、文学作品に食がどのように盛り込まれ、登場人物が食を如何に扱っているか、更に食の一環であるもてなしは登場人物の人間関係をどのように反映しているか、或は働きかけるのかなどは実に興味深い問題である。

さて、もてなしとは何を指しているだろうか。『大辞林』には、「持て成し」と表示され、「①客に対する扱い。待遇②客に出す御馳走。接待③人や物事に対する振る舞い方。態度④物事に対する扱い。とりはからい。処置」²と、四つの意味が並べられている。この解釈によれば、広義では非家族のみならず、すべての人間がその対象になり、また人間だけでなく、物もその範囲内の対象とされるが、狭義的に考えれば、人間、非家族に限られると捉えられよう。つまり、狭義的に考えた場合、家族に対する扱いや御馳走などはもてなしとは言い難いことになる。本発表では狭義的な意味で、もてなしを捉え、近現代文学

¹多田道太郎「食事と文化」(『食の文化』昭和 55. 10. 15 講談社 P9. 11)

²『大辞林』第二版 編者 松村明 1995. 1103 三省堂

に盛り込まれているもてなしを食と共に、それぞれの機能などを考察していく。食ももてなしも家族関係や個の社会的位置づけにつながる可能性は十分に考えられる。本発表では、漱石の作品の中で世間に背を向けている夫婦の物語『門』、と村上春樹の作品の中で家族色が強い『国境の南、太陽の西』（以下『国境の南』と略称する）との両作品を中心に、食ともてなしがどのように作品に盛り込まれているか、またそれらの考察を通してその場に立ち会う人物の内面、それぞれの人間関係などの解明を試みしてみる。

2 『門』にみる食・もてなし

過去、親友である安井への「不義」で親戚と疎遠となり、世間に背を向けるような姿勢を構えている宗助夫婦は、「山の中にゐる心を抱いて、都会に住んでゐる」仲の好い夫婦（十四の一）だと語られている。こうして世間とは殆んど関わらずに続けてきた二人の生活に、大家さん坂井家の泥棒事件や宗助の弟の入居などで、少し変化がおとずれる。もてなしを受けたり日常の食事の風景に変化が見えたりするのである。その中で、弟小六がメンバーに加わった食卓の光景、及び宗助が安井からの誘いで受けたもてなしが最も注目に値する場面であろう。

2.1 小六の入居によって変った食卓

(1) 嫂の後に跟着いて、茶の間へ通つたが、縫ひ掛けてある着物へ眼をつけて、(中略)

「御茶なら沢山です」と小六が云つた。(中略)「ぢや御菓子」と云つて笑ひかけた。

(中略)「ぢや御菓子も廃しにしませよう。それよりか、今日は兄さんは何うしました」と聞いた。(中略)「ぢや晩に何か御馳走なさい」(中略)小六は黙つて嫂の顔を見てゐた。彼は実際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつたのである。(一の三)

(2) 「小六が来たから、何か御馳走でもするが好い」と云ひ付けた。細君は、忙がしさに台所の障子を開け放した儘出て来て、座敷の入口に立つてゐたが、(二の三)(中略) 御櫃の蓋を開けて、夫の飯を盛りながら、

「兄さんも随分呑気ね」と小六の方を向いて、半ば夫を弁護する様に云つた。宗助は細君から茶碗を受取つて、一言の弁解もなく食事を始める。小六も正式に箸を取り上げた。(中略) 三人は飯の済むまで無邪気に長閑な話をつづけた。(三の二) 台所から清が出て来て、食ひ散らした皿小鉢を食卓ごと引いて行つた後で、御米も茶を入れ替へるために、次の間へ立つたから、兄弟は差向いになつた。(中略) しばらくして、御米が菓子皿と茶盆を両手に持つて、又出て来た。藤蔓の着いた大きな急須から、胃にも頭にも応へない番茶を、湯呑程な大きな茶碗に注いで、兩人の前に置いた。(中略) 小六が帰りがけに茶の間を覗いたら、御米は何もしずに、長火鉢に寄り掛かつてゐた。(三の三)

上掲した引用文はいずれもそれまで通りに叔母のところに住んでいる小六が、今後の自分の学費や生活費などの心配ごとを、兄が叔母に交渉してくれたかどうかを確かめるために訪れている場面である。余裕のないうちであるが、宗助は「何か御馳走でもするが好い」と御米に勧めたり、御米の方も御茶や御菓子などを出したりして気を使っているのがうかがえるが、小六はまだ引っ越していない、つまり、まだ客という時点では、御米にはそれ

ほど不自由の気配は見えない。とというのは、ここでは嫂が折角御菓子の用意で気を配っているにもかかわらず、「実際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつた」という小六の様子はせっかちで、兄が自分のために叔母に交渉してくれたかなど自分のことしか頭にない、わがままな性格を物語っているのではなかろうか。

「其晩宗助は裏から大きな芭蕉の葉を二枚剪つて来て、それを座敷の縁に敷いて、其上に御米と並んで涼みながら、小六の事を話した。」(四の八)という描写からも夫としての宗助の心を御米は感じ取っているはずであろう。その宗助の愛情への応えであろうか、小六の世話を引き受けようという御米の提案で、いよいよ小六が引っ越してくる。しかも、家の中で最も日当たりのいい六畳—御米の鏡台などが置いてあった部屋—を小六のために空けておいたのである。こうして小六が家族の一員になり、御米の日常生活—食事—に変化をもたらすのである。

宗助と一所になつて以来、御米の毎日膳を共にしたものは、夫より外になかつた。夫の留守の時は、たゞ独り箸を執るのが多年の習慣であつた。だから突然この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合わせながら、口を動かすのが、御米に取つては一種異な経験であつた。(中略)「小六さん、下宿は御馳走があつて」

こんな質問に逢ふと、小六は下宿から遊びに来た時分の様に、淡泊な遠慮のない答をする訳に行かなくなつた。已を得ず、

「なに左うでもありません」ぐらゐにして置くと、其語気がからりと澄んでゐないので、御米の方では、自分の待遇が悪い所為かと解釈する事もあつた。それが又無言の間に、小六の頭に映る事もあつた。(八の二)

小六が引っ越してから間もない頃の二人の応対の場面である。それまでは、宗助以外の人、しかも異性と一緒に食事を取った経験など御米にはなかつた。御米にとっては「一種異な経験」と感じられるのも無理はなかろう。あまり生活の余裕のないこの家での食事は粗末ではないかと気を使ったつもりの御米の「下宿は御馳走があつて」という質問に対して、「なに左うでもありません」と、小六が淡々と答えた。そのような返事で「自分の待遇が悪い」のではないかと、御米が余計に自分を責める羽目になってしまったのである。にもかかわらず、仕事が一段落つき、火鉢の前で「手を翳し」ている時、「兄さんは来年になると月給が上がるんでせう」と小六が唐突に御米に聞いた。突然の質問に御米は答えに戸惑っていた。そして、「兄さんは増俸の事をまだ貴方に話さないんですか」とまた小六に聞かれた御米は、「いゝえ、些とも」と答えた。折角話題を持ち出してはみたものの、二人の関係を和らげるような話題とは言えず、如何にすれば自分の学費や生活費の問題が改善されるのかという小六の自己中心の表れとしか言い様がないのではなかろうか。そのような好ましくない接触や気遣いで、御米はどうとう体調を崩してしまい、それまでのように「避難所」のような例の六畳で休むことができず、仕方なく座敷へ「床を敷いて」寝てしまった。

つまり、小六という「外来者」によって、それまで夫婦の食卓が変わったのである。否、

というより、昼間、この「外来者」と差し向かいで食事を取らざるを得ない、御米の食卓³という空間がすっかり変わった、といった方が適切であろう。その空間一昼間自分一人の世界一が変えられてしまったのである。その世界異変への拒絶反応であろうか、とうとうある日体調が崩れた御米はお昼になっても床を離れなかったため、小六が「たつた一人大きな食卓を専領して」昼ご飯を食べた。

2.2 坂井のもてなし

世間に背を向けて生活をしている宗助夫婦は、友達とも親戚とも殆んど付き合わない。そのような宗助は交際が最も嫌いであるが、交際の得意な大家さん坂井のうちには泥棒事件で時々訪れたり、持て成されたりするようになった。

(1) 木皿の様な菓子皿のようなものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを言わずに退がった。木皿の上には護謨毬ほどの大きな田舎饅頭が一つ載せてあつた。それに普通の倍以上もあらうと思はれる楊枝が添へてあつた。(中略)主人は箸とも楊枝とも片の付かないもので、無雑作に饅頭を割つて、むしやへ食ひ始めた。宗助は顰に倣つた。(十六の三)

(2) 「何なら御紹介ませう。丁度明後日の晩呼んで飯を食はせる事になつてゐるから。(中略)」

「御出になるのは御令弟丈ですか」

「いや外に一人弟の友達で向から一所に来たものが、来る筈になつてゐます。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、(中略)」

宗助は其夜蒼い顔をして坂井の門を出た。(十六の五)

(1) は正月の七日に坂井の家族が外出している時に、宗助が招かれている場面である。二人がかなり親しくなってきた時分であり、いつもの座敷の代りに、「僕の洞窟で、面倒になると此所へ避難するんです」という主人のお城のような存在の書齋で接待されているのである。接待とはいえ、そこには御菓子やそれを盛る皿、また主人の食べ方などからでは、宗助をかなりの親友と思い、気取らず振舞っている、その豪快さや和やかな空気が感じられる。そのような外交好きのように見える坂井にも家族などから「避難」したい時があり、しかも隣人の宗助とその場所で一時を過すということから、宗助はここで外部でありながら、自らずっと隔絶してきた外部とは異なり、安らかにいられる場—子供がいない御米との場とは違う場—に暫し身を置くことができたのである。

³小六という「他者」の闖入によって御米と宗助の小さな世界が変わった、という多田道太郎説を踏まえ、前田愛は「夫婦さし向いで茶の間のちゃぶ台を囲む小市民的な「食卓の光景」は、おそらく御米と宗助が独立した自分の部屋を所有している住み方と切りはなせない。中心に茶の間があり、宗助・御米・下女の部屋が三方に分岐しているという安定した居住空間の構造は、宗助夫婦の〈いま〉と〈ここ〉を見えないところで支えている。」と、空間論の視座より茶の間やちゃぶ台の位置づけや象徴を語っている。筆者は、この茶の間や食卓を宗助夫婦というより、御米にとっての意味がもっと大きいと捉えたい。(前田愛「山の手の奥」『漱石作品論集成【第七巻】1991. 10. 10 赤井恵子・浅野洋編 桜楓社 P199)

しかし、その後の坂井の次の誘いでその忘られていた暗闇の世界が再び宗助の前に突きつけられた。(2) の引用文である。坂井は蒙古から弟が帰ってきている。「冒険者」と称されるその弟と満洲から帰ってきた安井という友達が、明後日坂井のうちに食事をする約束となっている。そこで、宗助も誘われたのである。安井という名前は実は、宗助夫婦が裏切った友人の名前で、しかも彼はその後は満洲に渡ったという噂が耳に入っていた。ここ数年間タブーのようなこの名前を聞いた瞬間、宗助は「蒼い顔をして」急いで坂井家を出た。その「もてなし」一ずっと避けていた人も同席のもてなし—を受けたくないため、会社を一週間も休み、禅寺に籠った。旧友と思われる安井という人が同席する、この「もてなし」は宗助にとっては自分の唯一の家族である御米との関係が脅かされ、二人の家庭が崩壊される恐れがある席上であり、坂井ではなく語り手によって破壊力⁴を持っている場のように仕組まれているとも捉えることができよう。禅寺に一週間も泊まっていたにもかかわらず、全然変わっていない宗助の心の内は、実は、その仕組みがなくなるのを遠い所で待っていたに過ぎなかったからである。

3 『国境の南』にみる食・もてなし

家族を中心に書かれた作品は村上春樹の作品では珍しいものであり、『国境の南』がその類の一つである。家族を囲んで食事をする場面が少ないのも特徴の一つと言えよう。が、特に『国境の南』の中で、珍しく主人公「ハジメ」の妻の父親が登場し、「ハジメ」を食事に誘う場面は見落としてはならない意味深い箇所であろう。

義父はじっと僕の顔を見ていた。

「三十七といえど遊びたい盛りだな」と彼は言った。「仕事もばりばりできるし、自信もついてくる。だから女もけっこう向こうから寄ってくる。違うか？」(中略)「でもな、遊ぶのはいいが遊ぶ相手だけはきちんと選んだ方がいいぞ。うっかり選び方を間違えると、人生を踏み誤ることになる。…」(P183. 184)

二十数年ぶりに再会した、初恋の島本さんに頼まれ、一日しか生きなかった赤ちゃんの遺骨を川に流すために、二人で石川県に行き、天候不良で飛行機が欠航し、家に着いたの

⁴出原隆俊は、「御米に再び二人だけの生活が戻るという展開は、御米にとっては子六が宗助の血を分けた実の弟だとしても、夫婦という固まりを脅かす〈他者〉が入り込み、やがて出て行ったという点で、宗助にとっての安井の場合と相似形となしている。(中略) 安井が再び日本を離れる事によって宗助が、子六が坂井家の書生になることによって御米が、少なくとも一時的に救済される。安定した閉じられた空間に他の領域から異分子が入り込んで混乱を引き起こすという、様々に応用できる図式が、二人それぞれに用意されていたといえよう。互いに相手の苦悩を知り得ないのである。」と語り、安井の宗助への脅かしを御米に対する小六の存在に置き換えることが出来ると見なしている。その苦悩が似ているかもしれないが、小六からの破壊力と安井の登場の破壊力は一所に語れないものである。後者は夫婦二人の人生にかかるほど大きな問題を抱えているからである。出原隆俊「子六という〈他者〉——御米と火鉢——『漱石研究』第9号 1997. 1120 翰林書房 P105

は翌日の朝になってしまった。妻である有紀子に嘘を吐いた。その四日後、義父—有紀子の父親—に食事に誘われ、赤坂の鰻屋で鰻を食べ、酒も大分飲んだ後のシーンである。勿論、義父は事業のことで誘ったのであろうが、有紀子に嘘をつき、初恋の島本さんと石川まで行って、天候のせいとは言え、結果としては彼女とその晩を過した後だったためだけに、「遊びたい盛り」の年、「遊ぶのはいいが遊ぶ相手だけはきちんと選んだ方がいいぞ」というアドバイスを聞かされたときには、まるで島本さんへの気持ちが遊びでないのかと、見透かされたような言い方に聞こえないこともない。義父は更に話を続けた。そして、子供のなかで、有紀子が一番可愛がっている子であることや、昔ちょっとした男女関係で自殺を図ったことがあるという話まで聞かせた。

アドバイスであると共に、脅かしとも捉えられようこうした義父の話を聞かされた「僕」は家に帰ったあと、昼間にもかかわらず、有紀子を強く抱いた。後ろめたさからなのか、暫くは有紀子と頻繁にセックスをした。ここで、面白いのは義父からのもてなしが鰻だったということである。となると、浮気に走っている「僕」にブレーキを掛けさせるほかに、娘との夫婦関係を深めてほしいとの意図で「僕」に精力をつけさせることを義父が企てた、という「もてなし」だったとも捉えることができよう。義父の計らいが偶然か早速効果を見せた。

が、実は「もてなし」の本望は幽霊会社設立に必要な名義借用の依頼だったのである。その場では、「僕」は疑問を抱き、軽く反論する程度でとどまった。その後、島本さんが暫く姿を消していた。そんなある日の午後、抑えきれない島本さんへの気持ちの反動であろうか、「僕」は有紀子に当たった。いつものように二人でうちで昼食を取っているところ、有紀子は父親から株売買の指示があったことを伝えたが、「僕」はそれまでと全く違う態度を見せ、義父からの指示に従わないと表明している。

「かまわない」と僕は言った。「手数料なんて払えばいいんだ。損をしてもかまわないよ。だからとにかく今日買ったぶんはそっくり全部売ってくれ」

有紀子のため息をついた。「あなた、この前お父さんと何かがあったの？何か変なことにかかわったの、お父さんのことで」（中略）

「ねえ有紀子、正直言って僕はこういうのがだんだん嫌になってきたんだ」と僕は言った。（P218）

「この前お父さんと何かがあったの？」というのは、前回赤坂の鰻屋で食事をしたことを指している。夫の態度が変わったことに有紀子はうすうすと気付いていた。父親と食事をしてから変わったのである。ここで、「僕はこういうのがだんだん嫌になってきたんだ」というのは何を意味しているのだろうか。「僕は株で金なんか儲けたくない」というのを「だんだん嫌になってきた」を理由にしている、つまり人工的な操作という不法の手段で株から暴利を得ることを拒絶している。それより、それを操作している義父—自分達を支配している金などの存在—に逆らおうと「僕」は試みているのである。この支配者のような存在の義父は金銭のみならず、家庭生活にも干渉していると「僕」は意識している。「僕」はそこから脱出を図りたかった。その第一歩として株売買の指示に従わない、反抗するといった意思表示を見せているのである。その続きに、「僕」の心理が次のように描かれて

いる。

僕は突然何もかも有紀子に打ち明けてしまいたいという激しい衝動に駆られた。自分の心の中にあることを洗いざらい全部喋ってしまったらどんなに楽になるだろうと僕は思った」(P223)

以上のストーリーの展開から考えれば、義父の「もてなし」には娘への心配のほか、無意識に家父長制度にある父親の支配者の権威—子供の家庭生活までの干渉—が再強調される意図が隠蔽されていたと考えられよう。一方、それ（その「もてなし」だけではなく）に気づいた「僕」はその束縛から逃れようと努力してみたが、その時点では「有紀子に今そんなことを打ち明けたところで、何の役にも立ちはしない。おそらく我々全員が不幸になるだけだ。」と考え、家庭生活から逃れることをここで諦めているのである。

4 結び

もてなしという装置に触れる際、中国の『桃花源記』の理想郷に入った漁師が、外来者にもかかわらず、村人が富の象徴である鶏肉を出し、温かい気持ちで招くという場面が思い浮かぶ。漱石文学でも例えば『虞美人草』に描かれている、宗近一家が甲野を招いている笑い声が絶えず、明るくて温かい場面を挙げることができる。しかし、『門』に盛り込まれている「食」「もてなし」、そして、村上春樹『国境の南』の「もてなし」はそのような単純な文字通りの意味にとどまらないのは上記の考察から明らかになっている。

『門』の「外来者」である小六が宗助夫婦の食卓につくことや、夫婦と同居することでその食卓の雰囲気だけでなく、その意味も変り、そしてその場での応対によって、登場人物の性格を窺うことができる。粗末であるが、一生懸命考えてくれた御米の心遣いより、金銭にこだわるのが現実的だ、という自己中心的な小六の性格の反映と捉えることができよう。食卓を囲むというのは元来家族の絆の象徴でもあろうが、そこを苦にするのはつまり家庭から逃れようとする印しであろう⁵。この点においては、村上春樹の『国境の南』にも見い出すことができる。「もてなし」、「食」には父親である父権、支配の意図がうかがえる。一方、支配される婿である「僕」は自分の意志—その時点では初恋の相手である

⁵ 芹沢俊介・小森陽一・石原千秋三人による「ゆらぎの家族」と題した対談のなかで、小森陽一は「明治という時代は（中略）家と国民支配の一番末端の組織として位置付けることによって、非常に強力な上意下達式の社会システムを作った時代だったわけです。それに対する反発が、漱石の書いたすべての小説にあらわれている。」と語り、漱石を明治の含め、明治時代の知識人が背負っているうちの重荷やそこから逃れようとする気持ちが当時の作家、特に漱石に書かれていることを述べている。（芹沢俊介・小森陽一・石原千秋—対談「ゆらぎの家族」『漱石研究 特集漱石と家族』第9号 1997.9 翰林書房 P7）／一方、山下悦子は「老若男女ともに「個人主義」を発達し、各自が「個性」を重要視するようになれば、親子、夫婦、親類などの血縁を共同性も崩壊せざるを得ないというのが、この未来記の考え方だった。」とあるように、つまり家庭や家族が崩壊していく必然性を主張している。（山下悦子「夏目漱石と家族」『漱石研究 第9号 1997.1120 特集漱石と家族』翰林書房 P42）

第 8 回国際日本学コンソーシアム「食・もてなし・家族 II」
日本文学部会 2013 年 12 月 17 日 於：お茶の水女子大学

島本さんに対する慕い、押さえ切れない恋—との葛藤に苛まれ、「僕」はその支配から脱出しようと図るのである。となると、「食」や「もてなし」は小説のなかで、家族の絆や関係を深める手段として発揮される一方、逆に破壊する力も潜んでいる—破壊のメカニズムとして仕組まれる一場合もある。となれば、冒頭で引用した「食というのは一種の暴力」で「攻撃性」のある、多田道太郎の指摘は『門』にも『国境の南』にも当て嵌まると言えよう。

テキスト『漱石全集』第六巻 1994. 5. 9 岩波書店

村上春樹『国境の南、太陽の西』2009. 6. 19 講談社

参考文献

『大辞林』第二版 編者 松村明 1995. 1103 三省堂

出原隆俊「子六という〈他者〉—御米と火鉢—『漱石研究』第 9 号 1997. 1120 翰林書房

芹沢俊介・小森陽一・石原千秋—対談「ゆらぎの家族」『漱石研究 特集漱石と家族』

第 9 号 1997. 9 翰林書房

多田道太郎「食事と文化」(『食の文化』昭和 55. 10. 15 講談社

前田愛「山の手の奥」『漱石作品論集成』七 1991. 10. 10 赤井恵子・浅野洋編 桜楓社

山下悦子「夏目漱石と家族」『漱石研究 第 9 号 1997. 1120 特集漱石と家族』翰林書房